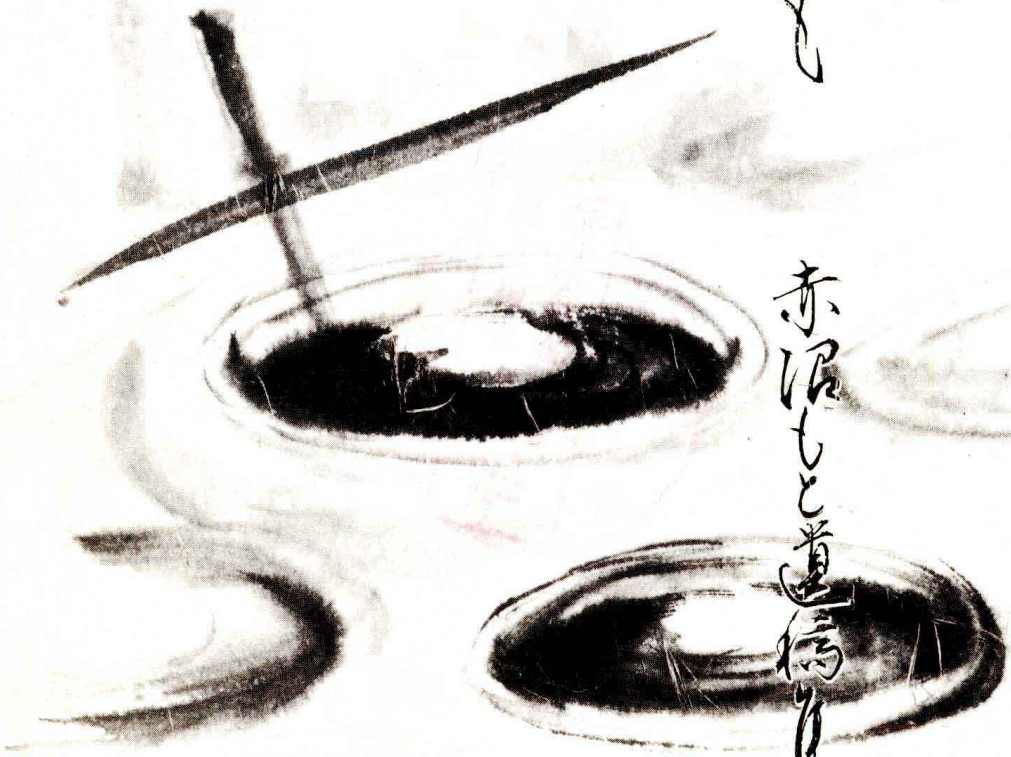
蘆の葉消ゆるまで

赤瀬ひと道編著

蓋の華

消ゆるとも



赤沼もと子遺稿集

赤沼もと遺稿集
藍の華消ゆるとも

非　売　品

昭和54年８月10日発行

原著者／赤　沼　も　と

発行者／赤　沼　正　実

福島県郡山市中田町赤沼48

ＴＥＬ0249（44）1927

編集者／赤　沼　正　光

大阪府枚方市楠葉中町67－２

ＴＥＬ0720（56）0758

印刷／近畿印刷株式会社

ＴＥＬ　06（472)1321

本書の複写・複製又は転用の御必要がある場合は、予め編集者迄御連絡下さい。

妻の遺稿集の発行に寄せて

赤沼正実

明るい笑声と共に妻が、ふと、今にも現れるような錯覚を起しそうになるが、五十年間、労苦を共にした妻と幽明の境を分けるようになって、すでにもう三年になります。

妻の生涯は、今、静かに顧りみると、苦難の道を勇敢に闘い通した七十年でした。

しかも、広い心ですべてを受けとめ、豊かな愛情を注ぐことのできた女性でした。

妻は、話しが面白く、話しぶりが愉快だったし、更に、相手から話の糸口を引き出して、どんどん展開させて、話に花を咲かせ、お互に楽しむなど、実に巧みでした。併し、自分のことを話題とするのは少なく、とりわけ、自慢話や自己宣伝めいた話を口にするのを潔よしとしないふうがありました。

そんな妻が、亡くなる年の、春もまだ浅い三月の初め頃、持病の喘息で床についていた私の所に、「家伝記」を書いたから読んでみて下さいと一冊のノートを持って来ました。

妻はその頃、老人性白内障で、右眼は不由になり、視力の衰えた左眼だけで書き上げたものだけに、精根を傾け尽したのでしょう、何やら執念すら感じられました。

晩年になって、自分の人生を振り返り、「人生とは？」、「家とは？」とか「人間とは？」というようなことに思いを走らせ、自分なりに整理してみたいという衝動に駆られていたようです。

それを赤沼家の二百年の流れの中に、また自分の七十年の人生の中に、題材を求めてまとめるなら、何か子孫の参考になるのではと考えたのです。赤沼家のわずかな歴史の中にさえ、勁き精神と軟弱な精神、そして、広い心と狭い心が現われ、赤沼家の栄枯盛衰を様々に彩り、幾多の喜びと悲しみを生んだと言えます。

「寛容と忍耐」、そして、**「創意と奉仕」**の精神が、赤沼家の本来の姿であり、心の豊かさにこそ特性が見出されるという妻の話を聞くにつけ、老いてもなお、逞ましい熱い血の流れを感じたことでした。

己れを口で語るのではなく、行動でこそ多く表現していた妻は、文章力も仲々のものだったと思われますが、遺稿集の中でも己れを語る部分は少なく不充分なように見受けられます。

私は、そこで蛇足を顧りみず、二三追補してみたいと思います。

父民治の急逝により、長女モトが、一家を支えることになったのは、十八の娘の時でしたが、一家が四散せず、赤沼家が潰れず、維持できたのは、奇跡に近いと云ってよいでしょう。

昭和の初め頃、農村はかなり不景気で、借金で田畑を手離す人々もあり、当時、労賃は、手弁当をもち一日弐拾五銭が相場であり、現金収入は、困難な時代でありました。

母二人と姉妹五人弟一人の八人の家族を養ない、その上、年間壱千円以上もの利息の支払いをする責任を背負うたのです。

普通の男でさえ、気が遠くなるか、気が狂う程の重荷だったことは、容易に想像できるのではないかと思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

います。

陽気と才気に満ちた十八の娘が、この重荷を背負い、全責任を全うしたのは、超人的な活動があったとしても、やはり奇跡に近かったと思うのです。

この奇跡には、併し、二、三背影があります。

「積善の家に余慶あり」とは、祖母キミのよく口にした諺であったが、黒の半吾、半五郎の染色技術の伝統に対する高い評価と、数々の社会奉仕と陰徳があって、お得意様は、染物をするなら、是非、赤沼染物店でとおひいきにして下さった方々も多かったと思うのです。

更に裁縫の神様とまで云われて、多くの娘さんから慕われた、祖母キミの陰の力があったことも忘れてはならないと思います。

裁縫の教え子は、その頃迄に、延べ数百人を数えており、その方々が結婚して、家族や娘の着物をつくったり、織ったりする時には、赤沼染物店に御注文をくださった例も多かったと思われます。

そして、健気(けなげ)な娘への応援とかなりの人気、超人的な活動があってこそ、あのような奇跡に近いことができたと考えて間違いありません。

天候が悪い時や、仕事の合間をみ、自転車で外交（外廻りして注文をとること）をしたりして、うら若い乙女の人気は相当なものでした。

農村では、当時、自転車の習慣はなく、市内でも、婦人が自転車を乗り廻す例は見られなかっただけに、新しい自転車に乗り、すっきりしたモンペ姿で、若々しく、娘が外交に廻ったので、衆目を集め、人気は大

変なものだったと聞いています。

先代からの老職人の松崎三郎治さんと母キセの三人で、染物をやっていましたが、女ながら、染物の技術は、門前の小僧の譬どうり、見様見真似で覚えて、更に職人相手に仕事をしながら、技術を身につけ、自分で研究と工夫を重ねながら向上させたのであります。

昭和二年福島県主催の工業博覧会に、江戸褄模様と正藍染印半纏を出品し、見事、銀賞に輝いたこともありました。

若冠十九才の乙女の涙ぐましい努力の結果は、さらに、染色業組合をはじめ、御得意様から賞賛を得て、一段の信頼を深めました。

いつの頃からか、「染屋の朝飯前」という驚嘆の言葉がありました。

朝早く、染物を川へ浸したり、濯物(すすぎ)をしたり、水洗をする外、作業場への干し張りをして朝食前に一仕事をこなしてしまうことから出て来た言葉であります。

これら作業は四季を通じて行ないますが、特に大寒中には、川面の氷を竿で割って、手を赤くしながらも水洗をします。井戸水は暖かいが、川水の方が、染め上がりがきれいなので、冬でも、川の水を用いていたのであります。

六十才になっても、この習慣を続けていましたが、このような血のにじむような必死の努力と超人的な活躍によって、赤沼家は支えられて来たのであります。

このような苦労を重ねたにも拘らず、終生、人柄は、単純素朴で明るいことが、取柄であり、それ故、多くの人から愛され、慕われ、広く交際させてもらっていたと思います。

亡くなってから、故人の持物を整理していると、六十才の折（昭和四十二年）の日記帳が出て来ました。

その年に、茸栽培に興味を持ち始め、技術の習得と研究に着手した当時の妻の日々の生活や心の様（さま）が、あからさまに誌されています。

あの頃の妻の姿や気持や話声まで、まざまざと思い起され、もっとあのように理解してやり、こうも手助けすべきだったという悔いの情が、後から後から湧き起って来ます。

精神的には、とても六十才の老女とは思えない旺盛な好奇心と若々しい事業心が見られますが、肉体的には高血圧に対し注意せねばと思いつつも、逞（たく）ましい活動の日々で、疲労と体力の衰えを覚えるようになり、もっと充分な休養を必要としていたらしいのに、早く気付いていたなら…と思うと読むのがとてもつらく、私には読み返すことができない程でありました。

併し、単純で活動的だった妻は、誰に対しても、常に明るく接し、交際や取引のあった方々の御親切や誠意に感謝していたことが、かなり沢山誌されております。

もし、それらの方々に、生前、言葉では伝え得なかった妻の感謝の気持をお伝えでき、陽気な姿や話を思い出して戴けることにでもなれば、大変、供養になるものと思い、日記も活字にすることに致しました。

思い出の部では、予想以上に沢山の人が、寄稿して呉れ、大変有難く存じます。

それぞれ、故人の姿や人柄を見事なまでに、生き生きと描き出しているのを読ましてもらいながら、かくも、皆さま方の心の中で忘れられずに生き続けているのを知り、とても喜しく思い、かつ、感激しました。

さぞかし、亡妻も喜びつつ恐縮しているものと思います。

なお、出版については、次男正光が、遺稿のノートを整理し、企画の労をとり、妻の多美子さんは、明るく楽しいカットを沢山書き、孫の良晃（中学二年）も、得意のスケッチを描くなど、多くの人の協力で完成致しましたことを御報告致し、感謝の意を表します。

昭和五十四年三月二十一日

藍の華消ゆるとも　赤沼もと遺稿集

目　次

妻の遺稿集の発行に寄せて……赤沼正実

第一部　赤沼家の栄枯盛衰を顧みて

一　私の生れ育ったふるさと……1
(一)　赤沼村風景……1
(二)　赤沼村の三つの名物……3
二　赤沼家の人々……14
(一)　赤沼家の由来……14
(二)　覇気と仁徳の人、半吾……17
(三)　飢饉における救済……18
(四)　七十爺の諸国漫遊……20
三　半五郎夫妻と五人の子供
(一)　寛容と陰徳の人、半五郎……21

㈡ 明治維新の折の出来事 …… 25
四 半蔵の遊蕩と赤沼家の転落
㈠ 三十年間もの遊蕩 …… 31
㈡ 借財と大家族を背負うた父、村上民治 …… 33
㈢ 悲運のキミ・ヨシノさん母娘 …… 40
五 茨の道を歩んで
㈠ 幼い頃の思い出 …… 53
㈡ 私の結婚した頃 …… 55
㈢ とうちゃんの帰還 …… 61
㈣ 昔の染物の方法 …… 67
六 ハワイ旅行の思い出 …… 73
第二部 母の日記
母の日記をのせるに当って …… 93
四十二年正月から、今泉・遠藤御両家の御祝儀まで …… 95
茸栽培法の調査から実施まで …… 126

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三部　母を偲んで

妻の最後の朝……赤沼正実　173
優しく逞しかった姉……村上仙吉　177
ほほ笑みを絶やさぬひと……村上幸子　179
女が一番幸せな時……石井博子　180
念ずれば現ず……江藤真澄　181
あらためてさよならを……飯久保友子　184
おわかれの言葉……赤沼照水　186
愛を惜しみなく……中島佑子　189
ぜひとも母ちゃんに来てほしかった……永恵　193
茸博士の称号を捧げたい……赤沼利恭　196
貞婦の相あり……赤沼正博　204
追憶四話……飯久保正幸　206
母に教えられたこと……赤沼洋子　211
母に捧げる詩……飯久保友子　217
(一) 母に捧げる詩……217
(二) 思い出追章……236
遺稿集を編集して……赤沼正光　268

第一部　赤沼家の栄枯盛衰を顧りみて

一　私の生れ育ったふるさと

(一)　赤沼村風景

今日からは、孫達は夏休みも終わり、学校に通い始めました。

来春には大学と高校へとそれぞれ、進学のため勉強中であった、孫娘の照水(てるみ)と孫の大蔵の二人は、夏休み中は、よく机に向っているのを見かけたが、もう学校に行っており、店のお客様でも来ない限り、全く静かです。

お店の営業の方も、息子夫婦に任かせきりで、電話の番をして、用件を息子達に報告するのが、私の日課です。

新聞は、朝、読んでしまい、テレビは、午後一～三時のドラマを見るだけで、もう別段、仕事もなく「日々是好日」というには、何か物足りない感じです。

そこで、昔の事など、思い出すまゝに書き誌してみましょう。

私の歩んで来た道は、何と茨(いばら)の道だったことよ、とつくづく思います。

さて何から、書き始めましょうか。

そう、私の生まれ、育って、生きてきた、この赤沼の村の事から、書き始めましょう。

と申しますのは、私は、夫、正実さんを婿として、結婚したので、赤沼以外に、どこにも住んだ事がございません。山に生えたきのこの様だと時々思うことがありました。

赤沼は、今でこそ、福島県郡山市中田町赤沼となっておりますが、つい数年前は、福島県田村郡宮城村大字赤沼字赤沼と申しました。

元来、五万石の三春藩（藩主　秋田侯）の領地内にあり、隣の守山藩と川を境にしていました。

古くは、岩城国の西端に位置していて、とりたて産物とてない寒村です。

昔の奥羽街道、そして、現在の東北本線の通っている郡山市には、昔から交通、商売、通学、通勤、文化等すべての面で依存し、密接な関係があって今日では、名称ばかりでなくもう実質上、郡山市の一部となってしまっております。

郡山市から真東に一里（四K米）程の所に、私の生れ、育った赤沼村があります。

大滝根川という、綺麗な流れに沿って、数十戸の家が建ち並んでいる小村です。

冬は、寒さが厳しく、昔は、川一面に水が張りつめ、歩いて渡れる事もありました。

夏は、水遊びに興ずる子供達の声が、一日中、甲高（かん）く聞えておりました。

夜ともなれば、蛍が飛び交い、夕涼みに村の人々が、その川にかけられた赤沼橋の上に三々五々やって参りました。

若い男女が、橋の袂（たもと）や川縁（べり）に屯（たむろ）して、楽しげに語らい合う情景が毎夜のように見られたものでした。

川の南側の県道は、往き来する車が、はげしく、あちこちで、楽しげに語らったり、屯している若い男女達が、顔を背けたり、俯いたりする有様が、車のライトに照らし出されて可笑しいくらいです。

赤沼橋は、つまり、村の人々にとって、一種の社交場であり、楽しい語らいの場でもありました。

こんな赤沼の村にも、三つの名物が、ございました。

(二) 赤沼村の三つの名物

その一つは、聖権現様と申す村社でございます。祈願をすれば、必ず願が叶うという信仰があって、出征兵士の家族や病気の人々が、沢山お参りし、秋祭りの折などは、近郊からの参詣人で、ごったがえしました。

権現様は、村の西のはずれの森の中にあり、数多くの杉の大木が、大空に聳えて、昼なお暗く、尊厳さが、あたりを包んでおりました。

もう三十年も前になりましょうか、こんな事が、ございました。

夫の正実さんが、寺社総代をしていた時でした。

神社の側の杉の大木が、根元の方が朽ちて、大風が吹けば、倒れて神社を押し潰す心配がありました。そこで、その古木を切り倒すことが決まり、樵を頼みました。

何せ周りが、二抱えもある大木で、神社に近く、杉の大枝や梢が、空中で、隣の杉と絡み合い、支え合うように繁っているので、切り倒

しの作業は、困難を極めました。

太いロープを何本も使って、あちこちの杉の木に結び付け、万ケ一にでも、神社の屋根の方には、倒れ込まない様に、何重にも処置をして、注意に注意を重ね、万端の手筈を整えました。

大木だ、危険な作業だという事で、村の仕事師、村上清太郎という方なども、応援に馳けつけ、作業の段取りもいかめしく、あれやこれやと指図されたりして、作業は開始されました。

いざ、切り倒しの作業となって、手慣れた樵の手にかかると、大きな鋸が、ぐいぐいと根元に喰い込み、一同は流石と感心して、眺め入っておりました。ところが、突然鋸が動かなくなってしまいました。押しても、引いてもビクとも動きません。そこで、もう鋸で引くのは止めにして、反対側から鉞（大きな斧）で切り込み、神社のがわに倒れぬ様にしようといったその矢先、バリバリという大音響と共に、杉の大木は、神社の屋根に向って倒れ、次の瞬間には、屋根瓦が崩れ落ち、柱はメリッ、メリッという音を立てて折れてしまいました。社は倒されて、杉の下敷になり、ペシャンコです。

突然、鋸が動かなくなり、押しても引いてもビクともしない…

一同は真青になりました。

人こそ一人も、社の中には居りませんでしたが、神社が御神体もろとも圧し潰されてしまったのです。あゝ、モッタイナイことを……と皆の者は恐懼しておりました。

ところが、不思議や不思議、御神体をお祀りしてある本殿だけがひょっこり、前に飛び出し、傷もつかず、そっくり立っておったのです。

それを見て一同はアッと驚き、恐れ畏まってしまいました。

御無事な御神体をば、目の当りにして、一体全体、どんな具合に崩れ落ちる神社の中から、本殿のみが飛び出したのだろうか?!

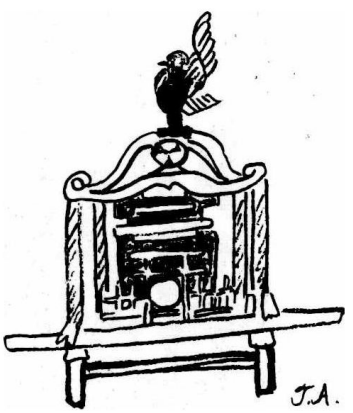
〝これこそ、ホンに神技というんだベイカ〟と一同、平身低頭し、御神体を伏し拝みましたとか。

後で判かったことの一つに鋸の動かなくなった原因があります。

切り倒された大杉の根元は、空洞になっており、その中に、大きな太い青大将が住みついていたらしく、逃げ場を失なって、杉と共に、その蛇も、鋸で胴切りにされてしまったのでした。その蛇の血糊で、粘りついて、鋸が動かなくなったのです。

原因は明らかになりましたが、次に、一同は、蛇は、神の御使えだろうか、或いは大木の精の化身かも知れないので、タタリはなかろうかと心配になりました。

とりわけ、直接、手を下した当事者の樵は、その晩から発熱し、原因不明の熱にうかされ、三日三晩、寝込んでしまいました。



御神体は、ひょっこり、神社から飛び出し、無傷のまま立っておりました……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com